

最優秀賞

母との約束

茨城県 茨城県立土浦第一高等学校一年 海老澤 仁華

管の中を真っ赤な血液が流れる。私と母の命はこの献血によって救われた。私が生まれた六月六日、母は大量出血により命が危うかったそうだ。そして私の命さえも。今日、十六歳の誕生日、私は献血をしていた。

私は幼い頃から母に「仁華の命は献血によって助けられたの。だから大人になつたら恩返ししてね。」

と言われて育った。小さい頃は意味がわからなかった。でも知らない誰かに助けられたということだけはわかっていった。大きくなるにつれて命の大切さや人に支えられて生かされたことが分かるようになってきた。そして自分が献血することによって恩返しができると思うようになった。献血は十六歳からすることができると知ると私の十六歳は恩返しから始めよう。と心に決めた。しかし、私は注射が大嫌い。注射針がささるのが怖かった。恩返しをしたい。でも針が怖い。心の葛藤があった。だから幼い頃のように練習といって爪で腕に傷をつけてみたり、怖くないと自分に暗示をかけてみた。そして十六

歳の誕生日を迎えた。私は勇気を出して献血に臨んだ。緊張した。怖かった。仁華弱虫だぞ。幸せに暮らせているのは誰のおかげか。輸血してなかったら生きてなかったんだ。たくさんの人に支えてもらったんだぞ。何を怖がってる、頑張れ。頑張れ。何度も何度も自分に言い聞かせた。

母は輸血された時の話をよくしてくれた。意識が遠のく中で輸血された時に体が温かくなっていく感覚が今でも身体に残っているそうだ。医師や看護師さんが必死で治療してくれていた。頑張ってと手を握ってくれた。「お子さんも頑張っているよ。」

その一言に死ねないと思いき、私はこの子のために生きなければと誓ったそうだ、体を血液が流れ温かくなる瞬間を今でも覚えていて、ああ生きていると思っただ。善意の心の温かさで生かされるための血液の温かさを母は感じたのだと思う。

献血が始まり自分の体から血液が出ていく。とても簡単なことなのに壮大なことをしたかのように心が爽快に

なっていく。私の血液が誰かの命を救えたら。母のように体も心も温めることができたなら。十六歳になり目標だった献血ができた達成感。救ってもらった命に感謝しながらいつの間にか怖さも痛みもなくなって気持ちが晴れ晴れとしてきた。看護師さんに献血が自分と母の命を助けてもらったこと恩返しをするために今日の日を迎えたことを話した。

「この血液も必ず誰かを救ってくれるから。そしてあなたのように感謝の気持ちでいっぱいになってくれるよ。また来てね。」

と言われた。嬉しかった。当たり前前の恩返しをしただけなのに。人の役に立てるかもというだけで私の心は温かくなった。

帰って母と祖母に報告した。母は自分が一番お礼がしたいけど輸血を受けた人は献血ができない。母の願いを叶えることができた。

「仁華がお礼をしてくれて良かった。ありがとう。」
「生まれてきてくれてありがとう。」

と言ってくれた。祖母は毎年誕生日に、ありがとうと言ってくれる。

「仁華が生まれてきたことは奇跡なんだよ。だからその命は大切にしなければいけないよ。大事にね。」
小さな頃から教えられてきた。

私は人に対して「死ぬ。」と言う人や、簡単に「死にたい。」という人が嫌いだ。そんなことを言う人にもう一度分かってほしい事がある。それは、自分が生まれてこれたという奇跡だ。生きている事があたりまえではない。一人の女性が自分の命をかけてでも必死に赤ちゃんを産む。命をかけてもう一つの新しい命を生む。このことがどれだけ素晴らしい事なのか、私は一人でも多くの人に分かってもらいたい。中には病気で生きたくても命を失ってしまう人もいる。だからこそ私は母が命がけで自分を産んでくれたことに感謝し誇りを胸に懸命に生きたい。私は多くの人の支えがあって生まれてこれた。これからも恩返しをしながら生きていきたい。

十六歳。感謝と感動。母と約束をかなえられた日。

